F. Scott Fitzgerald の短篇にみる
アメリカの夢と挫折（下）

丸　田　明　生

(5)

"Rough Crossing"（1920）は，新婚時代を過ぎてようやく中年にさしかかろうとする夫婦に訪れる一つの状況の物語といえよう。AdrianとEvaの二人は，この新婚時代に彼等の意志と感情の赴くままに生を享受したために，お互に傷つけ合う結果となり，又他人にも多大の迷惑をかけてしまったため，ここで新しい生活と生活態度を求めてヨーロッパに出かけるのである。この二人は"all his life he had tried to entertain people by making good stories out of his experience"[1] というMizener の言葉を待つまでもなく，Fitzgerald と彼の妻Zelda に重なり合う。

さて，Europe 行きの船の慌しくも，物悲しい出航の次にAdrian 夫婦に訪れたものは，彼等二人を，特に今は作家としてかなりの知名度を持つAdrian を放っておかない船中の若者達であり，その中で特に彼に関心を寄せ，又彼も心を惹かれたのは18才位とおぼしきMiss D' Amidoであった。そしてAdrianは何時の間にかこのD'Amido 嬢とdeck-tennisのダブルスを組むことになっていた。それを知ったEvaの心中は穏やか

1）　Arthur Mizener：*The Far side of Paradise*, p. 197.

でない。

> She remembered that on their honeymoon they had been in the finals and won a prize. Years passed. But Adrian never frowned in this regretful way unless he felt a little guilty. He stumbled about, getting his dinner clothes out of the trunk, and she shut her eyes. [2] (433)

Adrian はEvaの不機嫌を知りつつもMiss D'Amido との約束には勝てないのである。ここには時代の推移が感じられる。Fitzgerald の父親のgeneration なら彼はこの場合出向かなかったのではあるまいか。アメリカの文明と社会を長い間支えて来たPuritanism という精神的遺産は，時代という，特に1920年代というアメリカの激動期には，風の中の灯のように揺らぎつつある。今．その対比のために大下尚一氏が「ピューリタニズムの形成と伝統」という論文の中であげている，マサチューセッツ州植民地初代総督 John Winthrop (1588—1649) が，姙娠した妻Margaret にニュー・イングランドに出発した時書き送った手紙を引用してみよう。

> 「わが妻，いとしき妻よ。今夜はもう寝る時間だというのに，それほど急ぐ気がしない。わたしは一人でやすまねばならぬ。それでもいとしき妻にくちづけを送り，わたしたちの子供に神の祝福を祈ろう。」[3]

ここに我々は約 300年の距たりの生んだ愛情の姿の変遷をみるのである。

さてAdrian の気持にも，Miss D'Amido と楽しいひとときを過ごすことへの罪の意識は決して全面的に消滅しているわけではない。彼にはそれと引き換えにEvaの心を出来るだけ傷つけまいとする配慮がある。

2) M. Cowley, ed. by : *The Stories of F. Scott Fitzgerald*, V. Five, p. 433. 以下引用文の末尾の数字は上掲同巻の頁をあらわす。

3) 講座アメリカの文化「ピューリタニズムとアメリカ」p. 10～11.

"Can I do anything for you before I go?" と彼はEvaに向って二度もくりかえす。Evaは"No"という返事を不機嫌にくりかえす。一人取残されて彼女は Adrian とフランスに向う前に夢に描いた生活を再び思い起すのである。

> There was the little villa in Brittany, the children learning French — that was all she could think of now — the little villa in Brittany, the children learning French — so she repeated the words over and over to herself until they became as meaningless as the wide white sky. The why of their being here and suddenly eluded her; *she felt unmotivated, accidental, and she wanted Adrian to come back quick, all responsive and tender, to reassure her.* (435) (イタリックス筆者)

その頃Adrian と Miss Betsy D'Amido は，デッキで水しぶきに打たれながら愛の気持を交換していた。今や有名人になりつつあったAdrian に対して彼女の愛は強い憧れから発展したものだった。初めての出合いの時，彼女は Adrian に言う。"I fell in love with you the mimute I saw you," she said audibly and without self-conscious; "so I'll take all the blame for butting in. I've seen your play four times." (431)
そしてむしろ積極的に彼女はこのデッキで彼にkissを求めるのである。彼は少しためらいながらも抵抗力を失うのである。そしてこの水も滴たる18才の若き生命との陶酔の瞬間をFitzgerald は実に巧みに次の如く描写している。

> He could not remember when anything had felt so young and fresh as her lips. The rain lay, like tears shed for him, upon the softly shining porcelain cheeks, She was all new and immediate, and her eyes were wild. (436)

気晴らしに絵をかいたり，おしゃべりに気を紛らわしていたEvaも，

Adrian が船のどこかで Betsy と一緒にいると思うと，やはり気分が落着かなかった。そしてとうとう泣き出してしまうのであった。そしてこれも自分の罪かとも思うのであった。母が自分達の結婚に反対だったことも。やりばのない気持で一人デッキに出たEvaにハリケーンの嵐が用捨なく襲いかかった。その中で彼女は Adrian から贈られた真珠のネックレースを海中めがけて抛り投げるのである。それは Adrian に対する彼女の憤懣のあらわれであった。

しかし，Adrian は，Eva が一人デッキを意気消沈してさまよっている時既に船室に帰っていたのであった。一方Evaはそのままバーで酒に浸ったのであろう。あくる朝医者にその事実を報告される。そこへ船員の盲腸患者の死の報がもたらされ，それが彼女が前夜彼女のベッドで苦しんでいたにも拘らず冷酷に追い出した給仕であることを知ってEvaにも自分自身に対する呵責が生まれているうちに，彼女に何かとつきまとっている Butterworth という青年の元気のよい訪問によって，Evaの昨夜の酒の上での御乱行が紹介され，二人の額には明るい笑いが一時的にせよもどって来るのであった。

このButterworth に対してEvaはAdrian がBetsy に心を奪われていることに対して反抗する気持も手伝って無理に彼に傾倒しようとするようにもみえる。“I like that young man. He was awfully nice to me last night *when you'd disappeared*” (442). このイタリックス（筆者加線）の“you'd disappeared” という表現の中には，Adrian に投げかけられる皮肉と恨みがよくあらわれている。

やがて高まりつつあるハリケーンの中で，EvaはButterworth を相手にシャンペンを飲み，Adrian はにがにがしくそれを見守る。そして彼の如何なる言葉にもEvaは身を貸さない。又ButterworthにEvaはどうかしているから帰ってくれ，といっても彼女は彼を離さない。
“He won't go. I won't let him go!” She clasped Butterworth's hand passionately. “He is the only person that's been half

decent to me" (444). 遂にAdrian はButterworth に出て行くように怒鳴りつけ，彼があとで又来る，といって出ていくのを見たEvaは，このAdrian の仕打ちに逆上し，離婚の相談のためパリの弁護士に電報を打つべく部屋をとび出していくのである。しかしwireless room へ行く途中，波にたたかれてまさに死の危険にまでさらされているEvaを見つけた Adrian は，必死に彼女に駈け寄り，二人はしっかりと抱き合うのであった。

Fitzgerald と彼の妻 Zeldaの姿を殆んどそのまま描いたかにみえるこの作品は，この夫婦の平穏には過ぎ行かなかった一生を垣間みせてくれる。ある程度の地位と金とを得た中年夫婦におとづれる一つの波瀾。その社会的名声にあこがれて近づいて来て自分の魅力を，効果を試そうとするような若い女。そしてその瑞々しい魅力に惹かれる男の心。妻の嫉妬。これはどこにでも転がっていそうな筋書きである。しかし問題は，この物語で遂に二人をもとの鞘におさめたものは何かということになろう。

それは Adrian の側からすれば，妻のもつまだ衰えていない美しさであり，[4] そして彼女の周囲の人に与える不思議な魅力と才智であった。そして更に彼等をして鞘におさめしめたものは"Babylon Revisited" (1931) にみられる子供への愛着があったであろう。そして又これも Fitzgerald の性格によるのかも知れないが，世間の眼も意識したかも知れない。当時の社会の離婚に対するアレルギーは現代よりももっと強かったに違いない。しかし何よりも Adrian を，そして Fitzgerald を留まらせたものは，Fitzgerald の性格の中にあるように思われる。

Adrian は Miss D'Amido のフィアンセがパリ北駅に迎えに来ているという突然の言葉を聞いた時，彼女が永遠に彼の前から姿を消していく

4) この点についてAdrian は次のようにいっていることに注目したい。
She (Eva) was lovely; her cool distinction conquered the trite costume and filled him with a resurgence of approval and pride. (438)

のを感じる。「夢」の喪失である。その気持は次の如くあらわれるのである。"The real truth is that none of it happened,"……"It was a nightmare — an incredibly awful nightmare." (447).

Miss D'Amido も，決して「夢」に完全に一致する女神ではなかったのである。フィアンセのある身でAdrian に恋し，キスを求める女。そこには又，最初の部分でのべたgeneration のへだたりを今度は女性の側において具に実感するのである。

さてFitzgerald は，この物語のhappy endingを実生活にもたらしたのであろうか。Fitzgerald は娘のFrancis に次のような手紙を書いている。

> When I was your age — he wrote his daughter in 1938 — I lived with a great dream. The dream grew and I learned how to speak of it and to make people listen. Then the dream divided one day when I decided to marry your mother after all, even though I knew she was spoiled and meant no good to me. I was sorry immediately I had married her, but being patient in those days, made the best of it and got to love her in another way. You came along and for a long time we made quite a lot of happiness out of our lives. But I was a man divided — she wanted me to work too much for her and not enough for my dreams. [5]

この"The Rough Crossing" の発表された翌年，Zelda は精神分裂をきたすのだが，この手紙には予想以上に強い調子でZelda への恨みの気持が語られているようだ。この手紙は1938年約10年後に書かれたものだが，Mizener は又，Max Perkins がFitzgerald夫妻について語った次のような言葉を載せている。それをみても先程の手紙が誇張すぎるも

5) The Letters of F. Scott Fitzgerald, ed. by Andrew Tarnbull in *The Far Side of paradise* by Auther Mizener, p. 134.

のでないことが明らかのようである。"Scott was extravagant," said Max Perkins, "but not like her: money went through her fingers like water; she wanted everything; she kept him writing for the magazines." [6]

Fitzgerald は富と名声を条件に結婚の承諾をとりつけ，Zeldaに彼の「アメリカの夢」をかけた。そしてその夢は幻であるのか永遠なるものかと自問自答するなかで，彼の夢は新しい女性に移り，そして又Zeldaにもどって来ている。そしてこのあたりのFitzgeraldの「夢」は，女性を軸に回転している。彼の求めたものは女性の美であった。それは肉体の美であると同時に心の美しさでもあった。そしてFitzgeraldはEdwin Fussel と共に，彼の求めているものが"historic myth" [7]であることに否應なしに気づきつつあるのだろうか。それを私は次の作品で探ってみたいと思う。

(6)

Fitzgerald の短篇の中でも最大の傑作の一つとされている"Babylon Revisited" (1931) は，妻Zelda の精神錯乱の発作のあった年の暮れに書かれている。そしてその発作の原因が，Fitzgerald にのみあったとは思えないけれども———しかし彼の妻の身内のものはそれを彼に帰して非難したらしい [8]———この作品にはそれが自分の責任であるとする自己反省の基調が貫かれている。The image of Helen haunted him.

6) A. Mizener: *The Far Side of paradise*, p. 134.

7) Edwin Fussel: "Fitzgerald's Brave New World" in A. Mizener, ed. by: *F. Scott Fitzgerald*, p. 44. "historic" とは，人間はいつも泉を求めてきた，ということであり，"myth" とは，それが存在したことがない，という意味である。

8) Helenの姉Marion の次の言葉参照。"How much you were responsible for Helen's death, I don't know. It's something you'll have to square with your own conscience." [9] (191)

9) M. Cowley, ed. by: *The Stories of F. Scott Fitzgerald*, V. Six, p. 191. 以下引用文の末尾の数字は，上掲書同巻の頁をあらわす。

Helen who he had loved so until they senselessly began to abuse each other's love, tear it into sheds (192), というCharlieの言葉が如実にそれを物語っている。Zelda はHelen として心臓障害で死亡したことになっているが，精神病院入院という事実はFitzgeraldにとって死と同次元にとらえられたに違いない。そしてこのような「別れ」はrough crossing を幾度か経験した夫婦であるにもかかわらず，妻に対する懐しさと愛情を彼の中にはぐくみ育てており，Hemingway が "Homage to Switzerland" で描いている「別れ」——この場合は純然たる離婚であるが——が，男性主人公の側から相手を突離すような手法がみられるのに対し，この作品では主人公のCharlieは，相手を深く胸に抱き込むように物語っているところに著しい対称が見出されるようである。

> Going over it again brought Helen nearer, and in the white, soft light that steals upon half sleep near morning he found himself talking to her again. She said that he was perfectly right about Honoria and that she wanted Honoria to be with him. She said she was glad he was being good and doing better. She said a lot of other things — very friendly things — but she was in a swing in a white dress, and swinging faster and faster all the time, so that at the end he could not hear clearly all that she said. (192)

これはHelen がCharlie の幻想の中で彼にやさしく語りかけている場面であるが，彼女への愛は娘のHonoria との会話という印象的な技巧を通してほのぼのとした情感を描出している。

> "Darling, do you ever think about your mother?"
>
> "Yes, sometimes," she answered vaguely.
>
> "*I don't want you to forget her.* Have you got a picture of her?"
>
> "Yes, I think so. Anyhow, Aunt Marion has. Why don't

you want me to forget her?"

"I loved her too."

They were silent for a moment. (186)

まさに実際に交したかにみえるこの会話。その中に我々はFitzgeraldのやさしい，真摯な，そして今までの，女性に対するものとは全然異った愛のすがたをみるのである。既にいくつか取上げてきた今までの女性に対する愛は，「獲得」の異名に過ぎず，それに向う態度も，俗物紳士の金儲けと，他人に後れを取るまいとするアメリカ社会のトップバッターのそれに近かったかも知れない。今妻を失ったことによってFitzgeraldの「夢」の本質は，大きく角度をかえることになった。俗物性は姿を消し，より本質的，人間的なものへと舳先を変え始めたのである。それは彼が妻と引換えに始めて得られたものであったともいえよう。その目指すものは，子供のHonoriaを義理の姉夫婦から自分の手許に置いて育てることなのであった。そして彼女を渡してもらうことがまさに実現するかに見えた瞬間，昔の乱脈な生活をしていた時代の仲間が闖入してきて義姉の不快をかい，遂に彼の希望は消え失せてしまう。しかし彼は思う。やがて又訪れよう，その時にはHonoria を連れ帰ることが出来る，とそう思いながら昔馴染みのバーで彼は考える。

He (Charlie) would come back some day; they (Lincoln and Marion) couldn't make him pay forever. *But he wanted his child, and nothing was much good now, beside that fact.* He wasn't young any more, with a lot of nice thoughts and dreams to have by himself. (199) (イタリックス筆者)

「彼は娘が欲しかった。今のところ素晴らしいことはそれ以外にない。自分だけの考えや夢を持てる青年ではもはやない」というCharlie に全然違った意識の変革があるとは言えない。「今のところ」という言葉や，「も早，若くない」という文には，今まで彼が求め続けて来た"old dream" への未練があるようにみえる。彼がこの"old dream"を断ち切ることが出来て"new dream" ともいうべき，物質礼讃とまやかしの美

から足を洗った本物の価値ある世界——それは精神的なものに価値を置く世界らしく思われるが——に移り住むことが出来るかどうか。"Babylon Revisited" は，それに一歩を踏み出したかにみえる作品であるという意味で今まで取扱ってきた作品とはちがった世界を読者に与えてくれるものである。又"Babylon Revisited"という作品名は，かっては華やかなりし都，学芸の都Babylon，即ち彼にとってはParis をなつかしみながら，新生への門出の決心を告げに来た主人公の気持を伝えるものであろう。

そして彼はその決心を具体的に次のように書いている。

> The present was the thing — work to do and someone to love. But not to love too much, for he knew the injury that a father can do to a daughter or a mother to a son by attaching them too closely: afterward, out in the world, the child would seek in the marriage partner the same blind tenderness and, failing probably to find it, turn against love and life. (192—193)

このように彼はここで新しい門出の柱を「仕事」と「愛情」に置こうとしている。この場合「愛情」は「恋愛」ではなく，もっと広く，彼の脳裏には多分子供への愛が具体的なものの一つとして浮んでいたであろう。そしてそれに続く独白は，子供への「愛とは何か」についての忠告としてFitzgerald　自身の経験から得た結論を述べているようだ。それは，「愛」は盲目的な「やさしさ」を相手に求めることによって決して得られるものではない，もしそのようにすればFitzgerald　とZeldaのように手痛い傷を負うことになるという貴重な悟りともいえるべきものなのであった。

(7)

The two men drove up the hill toward the blood-red sun. The cotten fields bordering the road were thin and withered,

and no breeze stirred in the pines.(272) この"Family in the Wind" (1932) の冒頭の描写は，そのthe blood-red sunとno breeze stirred in the pines,という表現を中心に，これから将に起ろうとしている龍巻を予感させ，そしてその龍巻がForrestとGene の兄弟の身に振りかかる試練と苦悩を象徴しているといえるであろう。

Forrestはいつもウィスキーの瓶を手許から離すことの出来ない医者である。そして禁酒を決意したこともあったのだが，それはいつも不成功に終っていた。それで今は，酒は飲んでいても出来るだけの仕事をすることにしているのであった。

弟のGene は，喧嘩騒ぎで頭に弾丸を打ち込まれた息子のPinky の手術をForrestに頼もうとしている。しかしこのPinky はForrestによれば自分の娘程年は離れてはいるが恋人のように思っていたMary Decker と駈落ちして，その揚句の果てに捨ててしまって彼女を餓死に追いやった憎い甥である。しかし弟のGene も，Gene の妻Rose も，Pinkyの弟のButchも，かっては腕のいい外科医だったForrest に是非Pinky の手術をして弾丸の破片を出してくれるよう懇願する。彼はPinky に対する憎しみと，血縁の情との間にはさまれて苦悶する。

Forrest は嘗ては親類中で誇りに思われている有名な外科医だった自分が，今は酒のために，「確かにモントゴメリーじゃ，一番腕のいい外科の一人ですよ」("one of the bess surgeons up in Montmomery, yes suh" (275)) と，彼等が自慢することがためらわれる状態になっていたのである。そうして彼自身「チルトン地方ではもうぼくの平和は得られそうにない」("Something tells me,"……"that there's no more peace for me in Chilton County." (279)) と一人呟くのである。

"Family in the Wind" の第一章は以上のような経過を辿っているが，これを前章で取扱った"Babylon Revisited"と比較する時，それは一つの発展的連想を起させる。この物語では，"Babylon Revisited"に見ら

れた主人公のひたむきな懺悔心が影をひそめ始め，それにかわってこの苦しい状況をつくり出した原因を他に求めようとしているかにみえる。そしてその対称として登場しているのがPinkyである。Fitzgeraldの頭の中にはPinky とZelda が重なり合い，Mary と彼の娘Scottie が重なり合っていたのではないか。そしてPinky の両親，即ちGene 夫婦はZelda の両親か身内のものではないだろうか。そしてFitzgerald は今，Scottie の哀れな境遇の原因をZelda に帰せしめる気持を押え切れないのではあるまいか。このような想定のもとに次に進んでみたい。

兎角するうちに，このMontgomeryの町に大龍巻がやってくる。家を吹き飛ばし何千という死者や負傷者を生み，Gene 一家も死者こそ出さなかったが家は木端微塵に吹っとんでしまった。日頃は閑散としているForrest Janney 医師のもとにも次々と怪我人が運ばれてくる。そうしてこの中にForrestはPinky を見出すのである。この龍巻の中で弾丸傷で動けない彼が生きつづけて，ここに運ばれたということは奇跡だった。彼は「ハッ」と立ちすくむ。

> For a moment the doctor hesitated, but even when he closed his eyes, the image of Mary Decker seemed to have receded, eluding him. Something purely professional that had nothing to do with human sensibilities had been set in motion inside him, and he was powerless to head it off. He held out his hands before him; they were trembling slightly.
>
> "Hell's bells!" he muttered. (284—285)

Forrestは瀕死のPinky を目の前にしてMary のことがだんだんと心の中で遠ざかっていくことを感じ，医師としての義務感というか，責任感というか，何かそうしたものが彼の内部に湧き起ってくるのを感じるように思った。そうして彼の中にある二つの相反する力の激突の中で彼は「畜生！」と身もだえするのである。

Forrestは手術をすることになった。それは肉親に対する愛なのか，人類に対するヒューマニズムなのか，又彼の性格の弱さなのか，又それは単なる職業的義務感なのか。しかしいづれにせよ彼には憎しみをこえて愛が勝利したのである。多分彼の心は晴れ晴れとしたに違いない。

大龍巻の荒れ狂った跡地を歩んでいくうちに，Pinky を手術することによって目覚めたForrestのヒューマニズムともいうべきものは，更に振幅を拡げることになる。ただ龍巻の取材のためにのみこの町を駈回り，子供や老人にも同情の片鱗さえもみせない新聞記者と対称的にForrestは老女に金を与えたり，父親を失って一人ぼっちになったことも知らず無心に猫とたわむれる少女Helen に限りない同情をしめすのである。

> The doctor winced. He knew that her father would build no more houses; he had died that morning. She was alone, and she did not know she was alone. Around her stretched the dark universe, impersonal, inconscient. Her lovely little face looked up at him confidently as he asked:
>
> "You got any kin anywhere, Helen?"
>
> "I don't know." (287)

しかし，ここにはForrestの心の佗しさ，つらさが大きく影響していることを否定することは出来ないであろう。その証據に彼はこの土地から永遠に去ってしまいたいと思っているのである。かってはこの土地は彼が疲れた時舞い戻ってきては休息し，隣人たちと素朴な生活を楽しんでいた土地であった。その土地も今無残な姿となった。その上彼は思う。

He knew that the present family quarrel would never heal, nothing would ever be the same, it would all be bitter forever. (288)

Forrestのいう family quarrel が何を指すか。それは言うまでもなくFitzgerald自身の家族を指しているのであろう。Fitzgerald は，自分をこのような奈落の淵におとし入れた犯人としてZelda を非難しなが

ら,一方では彼女が置かれたみじめな立場——Pinkyの負傷というもので描かれている——をみると，この苦境から彼女を救ってやることによって自分も共に沈降した泥沼から這上がろうとする。Pinkyの手術の決心にはその意味も含まれていたのであろう。Fitzgeraldはここに至ってZeldaによって代表される——それはさきにJosephene storiesによって作品中に示されたものと大変類似しているが——物質的なものの追求，言葉をかえていえば，アメリカ的幸福や成功の追求が，このような悲惨に至ったことを知らされるのである。「金持になること」から出発した彼等ScottとZelda はその極端の見本ともいえるであろう。"Family in the Wind"は,創作のヒントを実際にアラバマ地方でみられたtornadoes[10] から得たものだとFitzgerald は語っているが，このようにして出発した者達に必然的に襲いかかってきた龍巻といえよう。そしてそれはFitzgerald の家族でいえば，Zeldaの精神病の発作による一家の離散であり，アメリカ全体でいうばウォール街の大恐慌であったといえよう。

Janney 医師は，Gene に家の資金にと 100ドル渡してこの土地を去るのである。彼は離れゆく汽車の座席に身をもたせかけながらウィスキーの瓶を取出し，これもやがて止めなければなるまい，と思うのである。赤十字に引取られていったHelenを自分の娘として育てようと決心しながら。45才にして再出発の決心をする彼は，このウィスキーの一瓶を最後の勇気の源泉にしようと，酒との最後の別れを惜しもうとする。それと同時にこの瓶にかかる費用をHelenの世話にまわさねばなるまいと思うのである。

"All right, Helen," he said aloud, for he often talked to himself, "I guess the old brig can keep afloat a little

10) A. Mizener: *The Far Side of Paradise*, p. 148.; described as follows: Charactaristically Fitzgerald described it as "based on his experienced in the tornadoes that recently swept part of Alabama."

longer — in any wind." (293)

この文には再生への願いと祈りがこめられている。しかし彼の過去はまだ「酒」に象徴される如く，あまりにも生々しくその残滓をとどめ，それはFitzgerald Hero のまぼろしの成功を記念するかの如くである。さてそこで，Forrestは，Helen のために酒を断つことが出来るか。龍巻という大嵐を契機として彼はLear のように精神の偉大さに到達出来るであろうか。それを我々は次の"Crazy Sunday" (1932) で観察したい[11]。

(8)

Joel Colesはある映画会社で台本書きをしている28才の男である。彼は自ら下働きを装ってはいるが，それは本心ではない。彼の母は有名な女優だったし，自分はハンサムであることを自負していた。しかし彼は日曜日といえども酒も飲まずに家で仕事をし，最近ではO'Neill のものを手掛けていたし，そのことは監督のMiles Calman にも信頼されるという結果を生んでいた。

そんな或日曜日，JoelはMiles によってパーティに招待されるのである。それは若者としては将来への明るい第一歩であった。Joel was flattered. It would be a party out of the top drawer. It was a tribute to himself as a young man of promise (195). ここには "Family in the Wind" の ending の部分で次第に結実していった Fitzgerald Hero, Forrest の再出発への決意が具体化されようとしているかにみえる。彼はForrestが誓った禁酒の誓言をしっかりと胸に

11) この章においては，Fitzgeraldの実生活をかなり組みこんで考えて来たけれども，それはそれなりの必然性があると思ったからである。酒瓶の手放せいForrestの設定，Helen も又Mary 以上に具体的にScottie を連想させる。そしてForrest の妻が具象としては現われないこと。このような意味で，この作品を理解するには"Babylon Revisited" と共に，Fitzgeraldの当時の状況を抜きにしては考えられないからである。

いだく。そうしてこのパーティの席でもアルコールは絶対に口にすまいと思う。DirectorのMilesはheavy drinker を嫌っている。それ故，彼はMiles の眼前で自分が酒を断る演出をしてみたいものだと思うのである。

やがてパーティが始まるとMiles の妻StellaがJoelの傍を立去ろうとしなかった。Joelは母親ゆづりのdramatic adequacy でもって，"Well, you look about sixteen！（295）と言葉を切り出しておいてcynic な世相批判をぶつことによって自分を売り込もうとするのである。

> "Everybody's afraid, aren't they？" he said, looking at it (cocktail glass) absently. "Everybody watches for everybody's blunders, or tries to make sure they're with people that'll do them credit. Of course that's not true in your house," he covered himself hastily. "I just meant generally in Hollywood." (296)

これはFitzgeraldがHollywood の世界に入るにつれていよいよその意を深くした実感であり，アメリカ社会の縮図とも彼が考えたものでもあったことは又事実であったろう。しかし，一方の手にそういう批判を持ちながらも，一方ではJoelの心はあの"old freshest boy" の世界に這入りこんでいく。

このパーティの雰囲気の中で，彼のcocktail を手にすまいという誓いは瞬く間に崩れ去り，Miles の眼を盗んで遂にそれを口に持っていくのであった。

ここにおいて既に再生の芽は摘みとられてしまったと言えよう。Fitzgerald Hero が真の再生と開眼を求めており，そしてその方向を正しく選んでいたならば，彼はHollywoodに来なかっただろうし，又特にこのアルコールの饗宴には来るべきではなかった筈である。Fitzgeraldが，主人公のJoelの登場の場面で，"not yet broken by Hollywood" (294)と，暗にHollywoodの世界に,やがて来る彼の衰微と凋落の責任をもたせるような表現をしていることは非常に注目に値する。たしかにそ

れは，ある意味では正しいといえよう。Hollywoodこそは，Joelも看破している如く千金の渦巻く世界であり，歓楽の巷である。しかし同時に，Joelも又責を負わねばならないだろう。禁酒と再生を誓い精神開眼に一歩を踏み出したFitzgerald Heroが又かっての泥沼に足を引戻されて，物質文明の世界に再び魅了されてしまったことに。

かくしてJoelは今やBasil 同然となる。Stellaの態度に気をよくして，

> ....he felt happy and friendly towards all the people gathered there, people of bravery and industry, superior to bourgeoisie that outdid them in ignorance and loose living, risen to a position of the highest prominence in a nation that for a decade had wanted only to be entertained. He liked them — he loved them. Great waves of good feeling flowed through him. (297-298)

しかしJoelのこの見方は必ずしも正しいものではなかった。カクテルは次第に彼の目を鈍らせ，彼に10年前のロマンチックな成功の夢を安易にみる錯覚を生ぜしめたからである。彼は酒の作り出す独持な世界の中で，自分もこのようなprominent positionの連中の仲間入りが出来ると思い込むのである。彼等の姿は，自分の未来の姿と一致するのである。だから彼は“liked them — he loved them”なのである。彼は又Gatsbyの夢を見始めているのだ。

彼はここで更に自分をみんなに印象づけようと，Stellaの応援を得てバーレスクを演じてみせるのである。しかし観衆の反応は，“the resentment of the professional towards the amateur, of the community towards the stranger, the thumbs-down of the clan (299), であった。彼は自分のみじめな失敗を意識すると，翌朝Miles に対して自分の自己宣伝癖を告白し後悔の気持を手紙にしたためている。

> DEAR MILES: You can imagine my profound self-disgust. I confess to a taint of exhibitionism, but at six o'clock in the afternoon, in broad daylight! Good God!

My apologies to your wife.

Yours ever,

JOEL COLES. (300)

Joelの「成功の夢」は,いち早くも崩れ,思い上った彼のself-showingは手痛い傷を負ったのである。"Crazy Sunday"のcrasyは, Sundayに彼が冒したcrazinessに対する自虐の言葉として響くのである。

しかしStellaの反応は違っていた。彼女はJoelが同席したことで楽しかった上, 彼女のsisterの夕食に彼を誘ったのである。Joelが, 又有頂天になったことはいうまでもない。しかしMilesはStellaのことでは非常にjealousだった。彼は自分にはEva Goebelという親密にしている女がいるにもかかわらず, Stellaに対しては別だった。StellaがJoelをさそったことを知ると彼は行くことにしていたgameを中止した。そうしてJoelも含めて一緒にsisterのpartyに行こうと提案するのである。

"Crazy Sunday again,"で始まる第三章は, Calman, MilesそしてStellaのcraziness, 特にMilesに向けられた言葉のようである。Joelがあれ程あこがれた人物も, その夫人を媒介としてその内部に入ってみれば, crazyに思われてくるのだ。MilesはJoelのparty行きを止めるからgameに行って下さい, という提案にも耳を貸そうとはしないのである。

Fitzgerald Heroの夢の挫折は, Heroのみの段階から他人も含めたものの段階にまで進んでいく。Hollywoodでみられるこのアメリカ人夫婦は, 二人の男女が結婚にあたって神の前で誓った誓言を破棄することを悪とする観念から遠ざかりつつある。いわば自由な恋愛が, この誓いの絶対性に優るというわけなのだが, しかし一方ではMilesのように妻が自分と同じ思考や感情のレベルで自由に振舞おうとする時, 彼は落着かない。それは人間性なのかそれともconventionがそうさせるのか。しかしこれは, 女性側からみれば夫が自由に他の女と恋をする時に感じる気持に外ならないであろう。不信は不信を呼び, 疑心は暗鬼となる。

そして夫婦は崩壊の危機に瀕する。

しかし結局Milesはgameに出かけていった。いや或は行ったことを装っていたのかも知れない，とJoelは思う。彼からStella に送ってくる電話や電報などからそのように想像されなくもない。Joelはパーティの後Stella に誘われて彼女の家に出かけ，そこでようやく彼女に愛の言葉をささやくのだが，度重なるMiles からの電話に彼女も落着かない気持のまま彼に答えたものは，“You attract me a lot and you know it. The point is that I suppose I really do love Miles” (309), というもの であった。

Joelは恐りはしたかった。彼は三角関係の厄介な問題に巻込まれなかったことにむしろホッとする。そして彼はすぐにでもStellaの家を辞したい気持になる。彼女と関係のある一切のものと縁を切りたい。だから彼女が申し出た運転手によってではなく，タクシーで帰りたいのである。彼女の“You are so sweet, Joel” (310), という言葉も耳に入らない。そうしてその時起った次の三つの事がJoelの索漠たる気持と符合している。

> ....he took down his drink at a gulp, the phone rang loud through the house and a clock in the hall struck in trumpet notes.
>
> *Nine — ten — eleven — twelve* —— (310)

かくして Joelは最後のよりどころであったStella をも失ってしまうのである。これはJosephene を失ったFitzgerald Hero 達の轍を踏む結果となったことを意味する。

しかしやはりCrazy Sundayであった。今度の電話のベルはMiles の飛行機事故をつげるものであった。全く途方に暮れたStellaにJoelは医者や友人に知らすべくその居所をたづねるのである。しかし彼の死を信じようとしないStella。やがて電報配達人が電報を手渡すに及んで今度はJoel に，“Think of what he must have felt. He was afraid

of almost everything, anyhow" (312), と言いながら，彼にとどまるよう懇願する必死のStella。ここにJoelは女の一面をありありとみる。それに対して彼は苦々しく答えるのであった。"Oh, yes, I'll be back — I'll be back!" (313)

そして今Joelは，Hero からナレイターとしての役割に移行しているようにみえる。そうしてFitzgerald Hero 自身はあたかもMiles に移行し，その悲惨な最後がThe Last Tycoon のStahr を連想させると共に，その最後を悲惨にしたものの原因をFitzgerald はナレーターのJoelをして次のように語らしめていることに我々は気づくのである。

> Joel thought of Miles, his sad and desperate face in the office two days before.
>
> In the awful silence of his death all was clear about him. He was the only American- born director with both an interesting temperament and an artistic conscience. *Meshed in an industry, he had paid with his ruined nerves for having no resilience, no healthy cynicism, no refuge— only a pitiful and precarious escape.*(311)(イタリックス筆者)

Joelはこの中でMiles の中に伝統的なアメリカ人の善良さや真面目さを認めている。しかしこのタイトルの"Crazy Sunday"によって暗示される如く，アメリカにおけるSunday はweek-dayにないcrazy な面をもっていた。そしてそれはやがてSunday のみでなく，更に一日一日，一週間をおおうのではないか。"industry" の罠にはまった人間はcrazyになり，それは日曜日に正体をあらわしてくるのではないか。それと同時に弾力性を持たぬ，古き善良な人々はなすべきを知らずしてアメリカの物質の繁栄から取残されるのではないか。Fitzgerald はこの「狂った日曜日」の繁栄は，精神的不毛というおそろしい暗黒と表裏をなしていることを，この作品を書くにあたって気づいていた答である。今まで取扱った短篇でそこまで到達しているものはなかった。その意味でこれはFitzgerald のユニークな視点をもつ作品といえよう。Basil stories

やJosephene storiesがどちらかといえば明るさのかげに暗さがかくれていたとすれば，その時が過ぎ去り,暗さが表面に出始めると,“Babylon Revisited” では先づその責任を自分にもとめ，“The Family in the Wind” では相手にも自分にも求め，そしてこの“Crazy Sunday” では殆んどその責任を周囲に求めているようにみえる。しかし，私見によれば，その責は恐らくFitgerald の側にも，又社会の側にもあったであろう。幾度かくりかえして来たようにFitzgerald はあの“Babylon-Revisited” や，おそくとも“The Family in the Wind” のあたりで，精神的にThe Great Awakening をすべきであったのだ。或はその方向をはっきりと見出すべきであったのだ。更に言えば，そこで彼はアメリカの潮流から一歩外に出るべきであったのである。あまりにも潮流に乗りすぎてそれに呑まれてしまったのではないだろうか。物質文明の潮流に。 (1973. 8. 31)